2022年08月20日 中日新聞 朝刊 17頁

学ぶ

キャリアファイル　ドラァグクイーン　by 学生スタッフ

性別超え「普通」を壊す

ドラァグクイーン。派手な衣装やメークで「女性」を誇張して演じる人のことだ。名古屋市を拠点に活躍するライラ・グレイルさん(38)は、イベント出演から体験講座、新たな人材の育成まで手掛ける。「ドラァグクイーンは最上級の自己表現」。そう語るライラさんを学生スタッフが取材した。多様性が認められつつある現代社会で、自らしく輝く秘訣とは。

ライラカンパニー代表 ライラ・グレイルさん(38)

名古屋市出身の日本人。アパレル会社に勤務していた2007年にドラァグクイーンの活動を始めた。19年、ドラァグクイーンらのプロデュースや衣装製作を手掛ける「合同会社ライラカンパニー」を設立。メーク講座、ゲイバー経営と幅広く事業を展開している。同年から、パレードなどで誰もが自分らしく生きられる社会づくりを呼び掛けるイベント「名古屋レインボープライド」の実行委員会共同代表も務める。

個性さらけ出し美しく

自作の華やかな衣装にカラフルなウイッグ、長いまつげ。名古屋市中区の自社スタジオで迎えてくれたライラさん。かわいさ、美しさ、かっこよさ。全てが混ざり合い、性別の垣根を超えているように見えた。

二〇〇七年に初ステージに立ってから十五年。「ドラァグクイーンというきっかけを手に入れて、自分はすごく幸せ者」とほほ笑む。

小学五年の時にぼんやりと男性が好きなことに気付き、中学二年でできた彼氏とは「自然に付き合っていた」。親や友人、教師も知っていて、カミングアウトを巡って苦しむことはなかった。高校時代には自身がゲイだと確信。ただ、女装に対して当時はむしろ嫌悪感があったという。

ドラァグクイーンに初めて出会ったのは、社会人になって間もない二十歳ごろ。遊びに行った先のクラブだった。「かっこいい」。それまで見た女装像との違いに衝撃を受けた。その後に入ったダンスグループでドラァグクイーンのバックダンサーに。グループの解散をきっかけに、自分がドラァグクイーンとして活動することを決意した。

デビュー時の観客からの拍手、称賛は「快感で、忘れられない」。その後も会社勤めは続けたが、三十歳ごろ、専業にしようと心を決めた。一七年に「ライラカンパニー」を創設し、一九年に会社化。事業は一般向けの体験会のほか、ゲイバー経営、衣装作りなどさまざま。イベントも開く。

メーク体験には全国から三百人が通うとか。九割は女性で、女性客に連れられて来てはまる男性も。メークの技術ではなく、美の固定観念を壊し、「新しい自分」に出会うことに重きを置いている。「男らしさ、女らしさをも越境するのがドラァグ」。京都の舞妓体験のように、名古屋観光の一つとして知られるようになることが目標だ。

一方、ドラァグ文化を多くの人に広げる活動は、ドラァグに関わる人たちから批判も受けてきたという。「ゲイ文化なのに、なぜ誰でも気軽に受け入れるのか」「一国一城のあるじ」であるドラァグクイーンが、なぜまとまって会社に所属するのか」と。

ライラさんは歴史をひもと。最初のドラァグクイーンとされるのは米国のゲイの黒人で「何重もの差別を見返そうという反骨精神から生まれた」。自分の感性を信じ、世間の「普通」をはねのけることこそドラァグの身上だと。

性の境界を超えた自己表現が当たり前の社会に。その夢に向かい、今年は「国際カミングアウトデー」に合わせて十月九日、名古屋市内でファッションショーを初開催する。

(文・塚原みのり、諏訪琴、構成・日下部弘太)

◇

次回は九月三日付、小中学生記者です。

ドラァグクイーン　派手な衣装や化粧で、異性愛者の男性が理想としている女性性を過度に表現する人たちを指す。ゲイの文化から生まれたとされる。ドラァグ(drag)は英語で「引きずる」の意味で、ドレスの裾を引きずる様子から名付けられたという。薬物などを意味する「drug(ドラッグ)」ではない。

ライラさん(左端)を取材する学生スタッフ=名古屋市中区大須で

取材レポート

有竹沙羅(早稲田大4年)　多様化と情報化によりドラァグクイーンが身近になったことでタレント化した話が印象に残った。

石川葵(愛知淑徳大1年)　未来を見据え、あえて伝統を壊し新たな風を起こす重要性を実感しました。

大津桃花(愛知教育大4年)　常に新しいことにチャレンジしている自分が一番キラキラしている、という言葉に刺激を受けた。

北村茉愛(名古屋学芸大2年)　固定観念を壊すという言葉が印象的だった。あらゆる選択肢を増やし、多様性を実現したい。

小西晴歌(BBT大1年)　三つの「と」、とにかく、とりあえず、とことん行動する、という言葉。私の人生を変えそうな気がした。

佐藤天音(浜松医科大2年)　さまざまな方面にアンテナを張って、迷ったら楽しいと思う方を選んで行動していきたいと思った。

諏訪琴(南山大2年)　型に縛られず、常に新しいことを追求する姿勢に感動した。私も失敗を恐れずに積極的に挑戦したい。

塚原みのり(南山大3年)　常に挑戦していく姿勢が自分を輝かせることにつながるという話が印象深かった。

(c).中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています